

朝日町学校跡地利用計画報告

Report : About Second Uses of Schools in Asahimachi

元倉 眞琴

MOTOKURA Makoto

飯田 恭子

IIDA Kyoko

ズスト アレクサンダー

SUST Alexander

The municipality of Asahimachi is as other mountainously situated places in Japan demographically over-aged. The number of pupil is constantly decreasing. Therefore four local elementary schools had to be closed since 2001. Although schools are primarily the places for education, they are also the centers of the community spirit. The aim of this investigation is, to find a second use for the four vacant schools and to prepare for putting the plans into practice. The following six elements should be combined in the plans for a second use: 1) Continuing to be a place for participants to learn from each other. 2) Continuing to be a place for children's activities, including inviting children from other places. 3) Providing support for the community by involving local citizens and maintaining it as a community facility. 4) Recruiting future public institutions. 5) Being inviting for visitors. 6) Useful for the local business.

The motivation for the second use must be based on local interests. Initial experiences have realized that a self-organized children's concert and a great tea party mobilizes the people and helps them to find their own most suitable form of conversion. The local movement of an Eco- Museum also shows good promises to involve the buildings as satellites. An open question is how a continuous form of organization can be realized.

はじめに

日本の他の中山間地と同様、朝日町でも高齢化が進んでいる。都市部への移転による若者の人口減と少子化によって子供の数が減少し続け、それに伴い各学校でクラス編成が困難になり、統廃合の方針に基づいて分校や小学校本校が閉校せざるを得なくなった。道路の整備が進み車を利用することにより、徒歩圏を軸に組まれていた小学校の学区を広げることが可能になったことも、統廃合をすすめる間接的な原因となっている。特にここ数年は急速に児童数が減少し、平成13年の立木小学校の閉校をはじめとして、4校の小学校が閉校、統合された。

小学校は、教育施設であると同時に、地域のコミュニティの核として機能してきた。「子供のために」と地域が一つにまとまって学校をサポートし、学校は、地域の「心のよりどころ」として大切な役割を果たしてきたのである。小学校がなくなることは、単に教育機関として学校がなくなる以上に、地域の絆を失ってしまうことを意味する。

高齢化、少子化、産業構造の変化など、朝日町の状況もきびしいものがある。しかし、美しく大きな自然と豊かな産物、人々に伝わる生活文化や伝統など、様々な“たからもの”に恵まれた土地でもある。それらの資源は、育み、活用していくことで次世代に引き継いでいかなければならないものである。廃校小学校の活用を考えることは、各地域の、そして朝日町の将来を考えることに他ならない。

1. 研究の目的と位置付け

本研究の目的は、朝日町の廃校小学校をどのように活用していったらよいかを具体的に提案することである。それは、各地域のこれからのあり方を考えることに他ならず、あくまでも地域の住民がどのように小学校の空間を活用するか考えるべきであり、自分たちにとって役に立つもの、小学校に代わる新しいコミュニティの核をつくっていかなければならない。

そのために本提案は、それらを検討していく上での「たたき台」として位置づけられ、今後も各地区の住民の方々との話し合いや、朝日町の行政や教育の関係者たちとの十分な調整を続けていく必要がある。

2. 研究方法

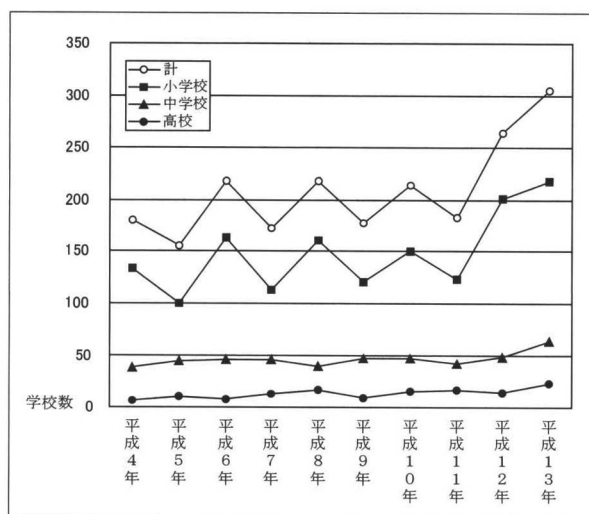
基礎調査として、朝日町の小学校の歴史と現状調査、跡地利用に関する地区住民の活動と要望調査、小学校周辺の環境と様々な資源“たからもの”¹⁾の調査を行い、また、全国の学校跡地利用の実例の分析を行った。そして、それらの調査結果をもとに提案内容を検討したが、特に各地域の特性を理解し、それぞれの地域の活動のための施設として小学校が活用されることに重点を置いた。

各地域の環境と資源“たからもの”の調査は、東北芸術工科大学の特別研究として、NPO朝日町エコミュージアム協会と合同で行った。また、調査研究の中間報告は、朝日町学校跡地利用検討委員会で3回行われ、様々な視点から検討され、多くの適切な意見をいただいた。

3. 全国の学校跡地利用の分析¹⁾

(1) 全国の廃校の実態

過疎化と少子高齢化、都市部では郊外化に伴い児童数が減少し、複式学級や1学年10人未満単位の学校が増加することで、スポーツ活動や集団での学習活動に支障をきたす状況となり、平成4年度から平成13年度までに学校の統合等によって全国で2,125校が廃校となった(グラフ1参照)。平成12年度以降は毎年250校以上が廃校となり、廃校数は増加傾向にあるとみられる。そのうち小

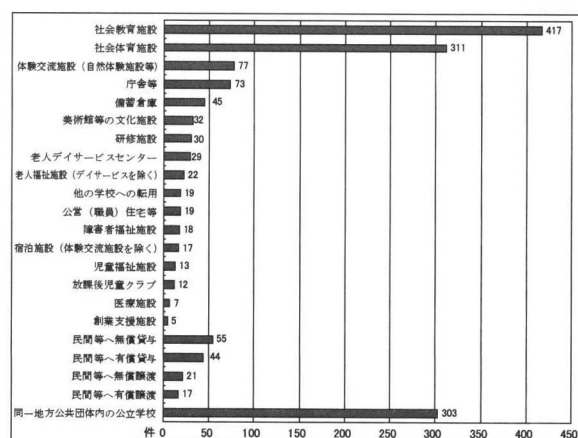


グラフ1 全国の廃校数の推移

学校は、全体の7割を占める。

(2) 全国の廃校施設活用の動向

廃校となった現存施設の約80%が、社会教育施設や社会体育施設、体験交流施設、庁舎、他の学校などに転用されている。その活用用途で最も多いのは公民館や生涯学習センターなどの社会教育施設で、次いでグラウンドや体育館が社会体育施設として登録されている。



グラフ2 現存施設の活用用途

しかし、過疎化により廃校となった施設では、常駐職員がいない場合が多く、半数あまりの施設が月2~3回以下の稼働日数であり、毎日活用されている施設は1割に満たない。また、施設整備や運営・維持管理は公的資金に依存する傾向が強く、運営・維持管理を利用料のみでまかなっている施設は、1割未満にとどまる。

(3) 全国の廃校活用施設^{2) 3) 4)}

全国の廃校の跡地利用には、次のものがあげられる。

・教育施設

専門学校などの誘致、仮校舎

・社会教育施設

1. 地域コミュニティー施設

公民館、集会場、生涯学習センター、婦人教育施設など

2. 図書館・博物館系統施設

図書館、郷土資料館、植物園、テーマ館など

3. 青少年教育施設

野外自然教育、スポーツ合宿、宿泊交流など

4. 生涯学習・研修施設

大学のセミナーハウス、企業研修、自治体間の交流など

5. 体育・健康施設

スポーツ施設やアウトドアスポーツのための施設など

・文化施設

1. 芸術・文化施設

絵画、彫刻などの美術作品の制作や展示など

2. 音楽・芸能施設

音楽、演劇などの上演や練習場など

3. 手工芸施設

陶芸、木工、竹細工、ガラス、和紙などの制作や展示など

・福祉施設

1. 児童福祉施設

託児所、学童保育など

2. 高齢者福祉施設

デイサービスセンター、要介護高齢者施設、高齢者生活福祉センターなど

3. 障害者福祉施設

共同作業所、障害者のキャンプ場など

・農林業振興施設

1. 農林業の振興施設

特産品の契約栽培、森林管理の拠点など

2. 農林業の体験施設

体験農業、観光農園や山菜狩り、市民農園とそれに伴う休憩所など

・特産品生産・物販・飲食系事業施設

1. 特産品の生産・加工施設

漬け物、手打ちそばなどの特産品の加工生産やそれらの体験事業など

2. 特産品の販売施設

特産品の販売など

3. 飲食店施設

郷土料理店、レストランなど

・保養・宿泊系施設

自然や里山を周辺に持つ民宿や旅館、ホテルなどの施設、温泉を備えたりリゾート施設など

・地域防災施設

避難所、備蓄倉庫など

・その他の施設

医療施設、公共施設の仮庁舎、NPO団地、研究室、工場、職住近接など

・イベント開催施設

夏祭り、運動会、物産市などの開催拠点

日本各地の事例からは、これらの事業内容を複数包括した、複合的な施設としての転用が数多く見られる。

農林業の体験施設では、グリーンツーリズムの拠点として、田植えや稲刈り、芋掘り、搾乳体験、鶏の解体など様々な体験農業や市民農園での無農薬野菜の栽培、観光農園とそれに伴う休憩所などの利用があげられる。栗ひろいや山菜狩り、きのこ狩りなどの山の幸の収穫、枝打ちや炭焼きなどの林業体験、森林保護活動もおこなわれている。また、地元の素材を使った郷土料理店や蕎麦屋、一風変わった料理にアレンジしたレストランなどがグリーンツーリズムの拠点や宿泊施設に併設されていることが多い。

保養施設では、施設周辺の里山や溪谷の散策、川遊びや海水浴、スキーや釣り、キャンプを楽しめる宿泊施設が多い。ホテル風のものから旅館、民宿、ユースホテルなど様々なタイプがある。木造校舎の雰囲気を残したものも見られ、地元料理を提供する宿やイタリアンレストランのある宿、温泉を備えたりリゾート施設もある。1泊5,000円くらいから提供しており、宿泊数は、数家族の受け入れから200名にも対応できる宿まで様々である。グラウンドなどを駐車場として整備し、夜間照明を設置している。

(4) 全国の活用されている廃校施設の運営と管理

1) 運営・管理の組織形態

町や村が大家として管理し、運営は契約に基づいて借り手が行うのが一般的である。借り手は、都市農村交流などの目的で他の地方自治体であったり、企業や学校などの法人、芸術家などの個人やグループである。また、地区連合会が自主的に運営したり、第3セクターを設立する事例もある。

2) 運営に携わる人々

地元の風土や歴史、伝統などに詳しい知識人や語り部、郷土料理や民芸、農林作業などの土地に伝わる経験や技術をもつ人材が活躍するが、それらの人々は、高齢者やお母さんたちであることが多い。また、支配人、腕の良い料理人や職人などの専門家、教員や看護師、保健師などの有資格者が力添えをする場面が見られる。

雇用に関しては、数名の常勤職員をおくところから、数十人など的高齢者や主婦のパートタイマーまで、雇用者数は事例により様々である。若者にとって魅力のある職場を整備していくことも課題となっている。

3) 協力団体

協力団体としては、大学などがアイデアを出し、民間企業が経営のノウハウをアドバイス、銀行などのコンサルティングにより市場の動向を把握し、JAが特産品の開発と地元農家をコーディネートし、生活共同組合が組合員を通して宣伝するなど、プロフェッショナルな組織や団体から、それぞれの分野について協力を得ている。多くの事例では、企画者・団体が、施設の転用のコンセンサスを得るために、地区住民や協力者、協力団体を時間をかけて説得している。

4) 事業費

国や県のモデル事業として補助金を受けたり、出資金、起債などで転用にかかる費用はまかなわれている。

5) 地域資源の活用

施設の利用者は、施設をとりまく周辺環境も同時に利用する。そのため、施設そのものの整備だけではなく、施設周辺の環境や風景も整備対象となる。その際には、自然や里山、歴史や伝統など、地域に存在する資源が活用されている。

6) 利用者と採算性

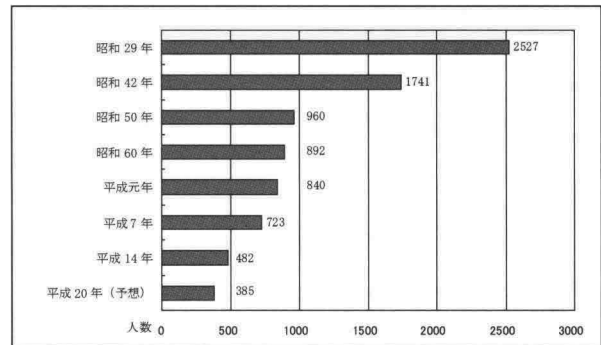
外部からの利用者を見込んだ事業を展開する場合、地域外の人々との交流を通して地域が活性化されるのみで

なく、転用した施設を維持するための資金を工面することも考慮している。町外からの利用者も訪れる施設に転用する場合には、サービスの質の良さが求められ、市場調査や営業分析が必要となる。

4. 朝日町の小学校と地区の基礎的調査

(1) 朝日町の小学校の歴史・統廃合の歴史

旧西五百川村、旧宮宿町、旧大谷町では、明治6年から9年まで相次いで小学校が設立された。昭和29年の町村合併により朝日町がスタートした時点の小学校数は、本校8校、分校8校の計16校で、2,527人にのぼる児童数があった。しかし、昭和40年代末から児童数が急速に減少し、平成14年には500人を切ってしまった。



グラフ3 朝日町の小学校児童数の推移

朝日町では、児童数の減少に伴い、昭和46年度から小学校の分校が2校閉校されることとなった。そして、平成7年の町教育委員会の学校整備計画の答申「二十一世紀をめざした朝日町教育の在り方」に基づいてさらに統廃合が行われ、平成7年度から5校の小学校の分校が、平成14年度までには4校の本校が廃校となった。

表1 現存小学校の児童数の推移

学校名	昭和29年度児童数	平成15年度児童数
西五百川小学校	698	119
宮宿小学校	461	171
和合小学校	171	61
大谷小学校(大沼分校含む)	623	133

表2 廃校小学校の児童数の推移

学校名	昭和29年度児童数	最級年度児童数	最終年度
立木小学校	203	5	平成12年度
水本小学校	95	8	平成13年度
送橋小学校	111	13	平成14年度
上郷小学校	165	27	平成14年度

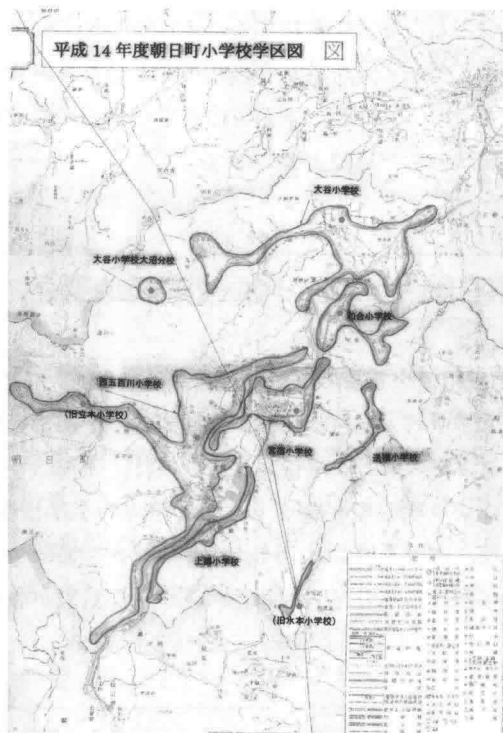


図1 朝日町小学校学区図（平成14年度）

小学生の通学方法は、基本的には徒歩であるが、3 kmを超えた遠距離ではスクールバスやタクシーを利用してゐる。統廃合によってバスやタクシーの通学者が急増し、平成15年には83人がそれらの交通手段を利用して通学している。

(2) 朝日町の廃校施設とその使用状況

昭和55年から新校舎の建設が始まり、今回廃校になった4つの小学校本校では、昭和57年から平成3年の間に新校舎が建設されている。

表3 廃校施設の面積

		立木小学校	水本小学校	送橋小学校	上郷小学校
校地面積 (㎡)	建物敷地	3,890	4,085	1,323	3,297
	運動場	5,336	6,635	3,312	8,360
	実験実習室・その他	1,320	8,405	1,808	2,663
建物面積 (㎡)	校舎	1,110	1,094	1,215	1,030
	屋内運動場	630	503	654	621

平成15年10月現在の校舎の使用状況としては、毎月1回子ども会での集まりや校舎の清掃をしている学校、教育研修センターとして夏に子ども会活動をしたり、自衛隊の合宿訓練に使用している学校、お盆のときに子供たちに解放している学校などがあるが、あまり使用されて

いないのが現状である。それにかわって体育館は、バスケットボールや剣道などのスポーツ少年団やママさんバレーなどに各校毎週1～3回の頻度で使用されている。運動会や祭などの行事も途絶え、跡地の利用方法が検討課題となっている。各地区の詳細については、「6.(2) 4つの廃校小学校の跡地利用に関する動き」に記す。

また、廃校分校の木造校舎は、町の有形文化財として町が管理したり、建物を取り壊して地区公園として地区が管理したり、民間業者に有償貸与したり、また未利用となっている。

(3) 廃校小学校周辺環境と資源の調査

各地域の環境の性格を認識し、地域資源“たからもの”を人的資源も含めて理解したうえで、小学校の跡地利用を考えるデータベースを作成するために調査を行った。

1) 調査対象地と地理的特性

調査対象地は図2のとおりである。地理的特性としては、「資料7. 資源地図」にもあるように、送橋、水本、上郷の3地区は最上川の東側、白鷹山系に属してゐて、その水系としてとらえると認識しやすい。そこでは、植生などの多くの共通点をもつと同時に、地形や高度の違いによるそれぞれの特性も見られる。

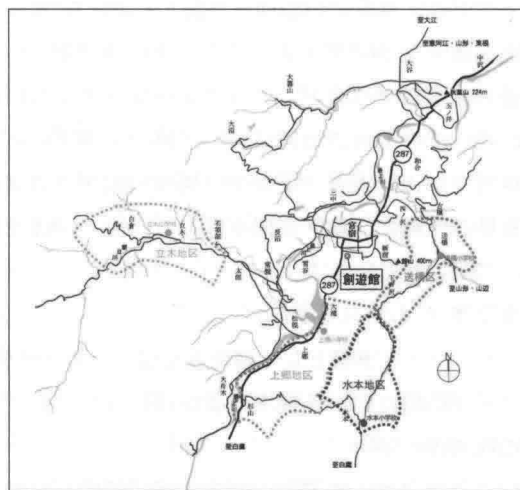


図2 調査対象地

- ・立木地区は朝日連邦からの支流である朝日川を中心とするエリア。
- ・水本地区と送橋地区は送橋川の上流と下流のエリア。
- ・上郷地区は水本地区の西に位置し、最上川に向かつての斜面地で河川を形成していないが、多くの湧水池が見られる。

2) 各地区の環境と資源

各地区の環境と資源の特徴は、次のとおりである。資料1～6に詳細な分類と関係図、活用の可能性を記す²⁾。

立木地区

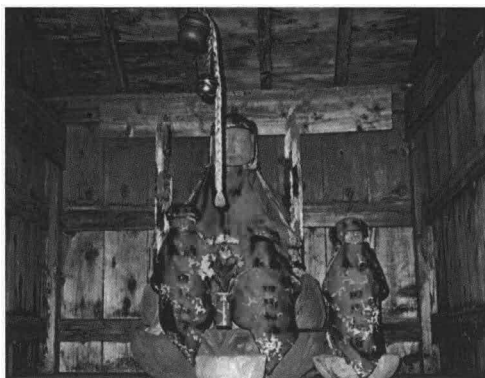
立木は、朝日川の流域のエリアで、白倉への分岐点以西は、「朝日自然観」方面も朝日鉱泉方面も、奥深く豊かな自然が残っている。この「自然力の高さ」がここの最大の特徴であり、魅力である。自然を保全しながら、その中で遊び、生活を営むには適した場所であり、旧立木小学校は、朝日川のそばの格好の場所に位置している。



玉石橋付近の滝



昆虫鑑定団のメンバー



雨乞い地蔵

水本地区

水本は、白鷹山麓の標高450mを越える高原の送橋川を挟んで位置する郡境の集落である。各種石碑が多く、古くから開けた場所である。表玄関は山形市及び白鷹山麓側に持ち、後ろの正面を朝日町とし、そのため経済圏は山形市の、文化面は婚姻関係の多い作谷沢地区の影響を多く受けている。朝日町との関係よりも、作谷沢など白鷹山麓のエリアとしてとらえるべきであろう。山形市に近く、親しみのある里山と自然を持つことが強みだ。

山麓の緩やかな台地を利用した、ホップや養蚕及び水田の農業を基幹としてきたが、昭和52年頃をピークに農業従事者は年々減少し、遊休農地が家の近くまで目立つ。



からくりの林



カワニラ



蛍の湧く沢

送橋地区

送橋は、川を挟んだ集落のある中堀と、侵食崖を上がれば河岸段丘の上位平坦部にあたる果樹地帯の十本木、そして北東部が急傾斜地になっている松保は頂近くまで耕された谷間の郡境の村になっている。川との関係が強く生活と結びついている。また、りんごを中心にした果樹栽培の長い歴史をもっていて、今日までしっかりした農業を維持している。山形市から25分という近さも有利である。



送橋河岸の櫨



ヒノ沢の清流

ヒノ沢の古い農道



ウバユリの実

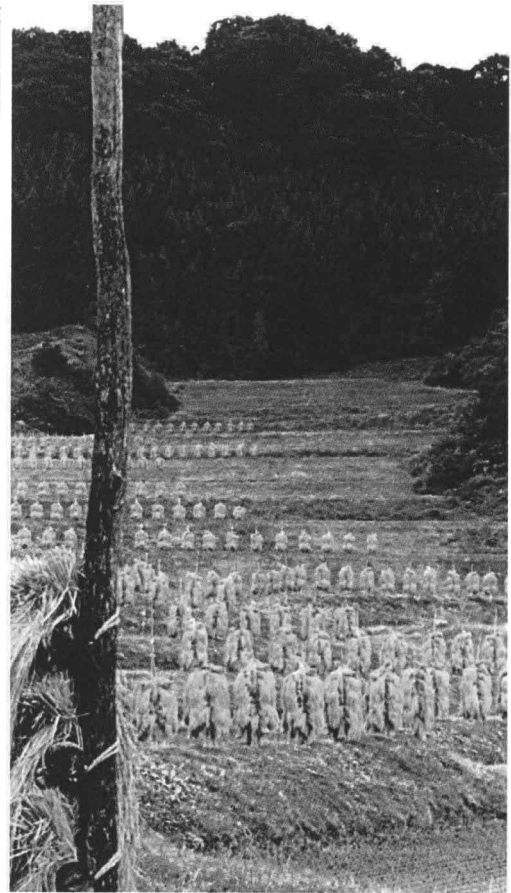
ヒノ沢の紅葉始め



上郷地区

上郷は、白鷹山泥流の先端となる尾根筋と最上川が平行する地形をもち、その間を籬壇形状の農地で覆われている。棚田の沢をつめると崖の根際に湧き水が各々あり、合計で4～6カ所の湧き水が農業用水及び生活用水をまかなってきた。かつては朝日町の花である「ヒメサユリ」の群落も見られた。湧き水を利用して家々では鯉を井戸に飼い、ハレの日の料理として利用した。農業としては、かつては果樹やホップや葉たばこ栽培が盛んであったが、現在は主に水田を兼業の形で残すものとなっている。

花畑の棚田



集落内の花壇



3) 跡地利用に対する地区住民の要望

今回の跡地利用計画案を準備するうえで、地区の要望を調査したものを次に記す。

立木地区

地区住民からの要望は特になく、廃校施設は、平成13年から町の施設「朝日町教育研究所」として登録されているが、あまり利用されていない。(平成14年3月現在)

水本地区

地区の代表者と朝日町教育委員会及び企画課、本学元倉研究室による協議では、地区住民の要望は特になく、町からの提案を待つ状況にある。(平成14年3月現在)

送橋地区

平成15年3月に「送橋小学校跡地利活用委員会」として協議を始め、「老人ホーム等高齢者の施設」「集落センターのような多目的利用施設」の案も上がっているが、山形県(地域)の防災センターの機能をもった「集落センター」を要望する方向でまとまりそうである。

上郷地区

平成14年5月に、以下の跡地利用案が検討の対象とされている。

1. 保育園 国道沿いで、子供の遊び場がない。
2. 歴史館 杉山分校閉校時の「たからもの」がどこにあるか分からない。上郷小学校の大切な物を残しておきたいことから、幅広い町の資料館にしたい。
3. 老人のふれあい場所及び体力増進センター 現在町にある「ふれあい荘」になかなか入れず、順番待ちの状態である。ますます老人が増えてくる。
4. 道の駅 朝日町、白鷹町に道の駅がない。地域の産物を販売することで活性化できる。

上記案をもとに3回の「跡地利用検討委員会」を経て次の案にまとまっている。

第1案 総合福祉トレーニングセンター(仮称)

町民のトレーニングルームと上郷小学校の歴史や上郷の歴史と伝統を収めた1室がある施設。

第2案 保育園

11月に上記案をもとに町管理課と覚書をかわしている。



旧立木小学校



旧水本小学校



旧送橋小学校



旧上郷小学校

5. 朝日町の小学校跡地利用の提案

(1) 小学校の跡地利用の基本的な考え方

1) 基本的な考え方と活用のイメージ

小学校があることによって「子供のために」という気持ちが地域の心をつなげてきた。運動会、学芸会などの行事は、地域と一体化したもので、小学校は単に教育施設というものを越えて機能し、そこに働く教職員もまた単なる教師という役割以上に、地区の事務局やプロデューサー、リーダーの役割も果たしていたに違いない。また、この地を離れた人々にとっても、帰ってくる場所（記憶の場所）として小学校の存在は重要な意味をもっていた。そのように考えると、跡地利用の問題は、「校舎が空いたので何か使おう」というような、空きを埋めるような代替的な考え方では決して上手くいかないだろう。そこで、小学校の跡地利用の基本的な考え方についての視点をいくつか示す。

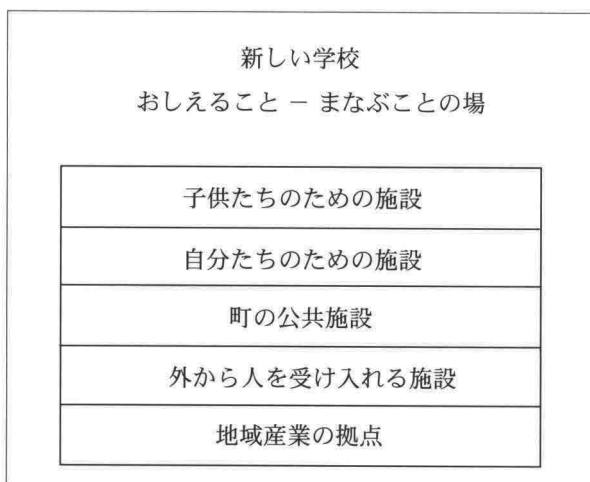


図3 施設活用の考え方

①学校であることをやめないこと

— 小学校から「新しいがっこう」へ

施設の転用後も地域の中心施設として、サポートし育んできた気持ちを持ち続けるために、学校がもっていた人々の「こころ」が一つにまとまる力を維持したい。人の営みの基本であり、人と人、人とのコミュニケーション（交流）の基本である「おしえること—まなぶこと」の間として、小学校とは違ったかたちで地域の学校を考える必要がある。その地域の新しい中心施設を「新しいがっこう」と名付けたい。



図4 おしえること—まなぶこと

②子供のための施設であることをやめないこと

- ・小学校がなくなって子供がいなくなったと考えるのではなく、別のかたちで子供がその地域に「来る」ことを考え、子供のための「まなび」と「あそび」の機会をつくっていく。
- ・基本的には、地域の人々が地域の自然や風土や生活の中から子供たちに伝えたいことを企画する。その内容は各々の地域で異なる。「4. (3) 廃校小学校周辺の環境と資源の調査」にあがっているようなものが基本になるだろう。外部の人たちの協力や参加を求めることも考える。
- ・小中学校の「総合学習」や、PTA活動の中に組み込む。朝日町の小中学校の関係者や父兄は、朝日町全体を「大きな小学校・中学校」として考え、地域ネットワーク教育システムとして検討する。

③自分たちのための施設として考える

- ・公民館的に使うことが出来る。
- ・「4. (3) 廃校小学校周辺の環境と資源の調査」に整理されるように、各地域はそれぞれ違った環境にあり、

違った資源をもつ。「新しいがっこう」はそれらの環境や資源を保存し活用する場（空間）として使用出来る。

- ・エコミュージアムのサテライトとして位置づける。
- ④町の公共施設として考える
 - ・朝日町全体で不足している公共施設がまだある。学校を改修して積極的に別の公共施設を据える可能性がある。
 - ・町の財政の問題など、クリアすべき課題は多い。
- ⑤外からの人を受け入れる施設として考える
 - ・クラスルームをはじめ、音楽室、図工室、調理室…など様々な設備の整った、かなり大きな部屋を沢山もっている。体育館や講堂も特別の空間である。それらの空間を使いたいと考えている人や団体は少なくない。
 - ・宿泊施設として改修し、積極的に外からの人を招く。
 - ・いずれの場合も単なる施設の転用に終わらずに、「新しいがっこう」という視点を導入すべきである。
 - ・「4. (3) 廃校小学校周辺の環境と資源の調査」で整理されているように、地域の環境や生活文化を多くの人と共に活かしていくことが出来る。「新しいがっこう」は、その活動のセンターとして利用される。JAや民間組織とのタイアップも考えられる。
- ⑥地域産業の拠点として考える
 - ・公共施設の活用という視点から、自分たちが直接事業を運営していくという考え方に変えていかなければならない。そのために法人化することを研究すべきである。ここを拠点として、地域の産業をつくりだし、後の世代がこの地で生活できる基盤をつくっていかなければならない。地域を一つの組織（会社）として考えていく発想が必要である。観光事業、教育事業、農業センター、商品開発研究所、農産物の商品加工場…などの施設として考える必要がある。

以上が、地域から発想される跡地利用の基本的な考え方である。つまり地域の価値を住民が自ら見つめ直し、そして外の人たちに知ってもらうこと。それらを産業と結びつけることで地域の持続性を作り出していくこと。それらは「おしえること」と「まなぶこと」が一体のものとして行われ、地域の人と外からの人が交流することによって「新しいがっこう」を構築していくことである。

2) 組織づくり

◇「新しいがっこう」の組織づくり

- ①各地域で「新しいがっこう」準備委員会をつくる。
 - そこで各地域の環境及び資源を調査し、活用を検討する。その結果を踏まえて、「新しいがっこう」を構成し各学期のカリキュラムを策定してみる。
- ②プレビューを行う。
 - 2～3日の学校を開設、授業を行う。外からの講師も参加する。
- ③法人化を目指す。

◇支援する組織づくり

- ①朝日町役場内に「新しいがっこう連絡会議」を設ける。
 - 各地区の「新しいがっこう」設立のサポートを行う。
- ②朝日町教育委員会内に「地域ネットワーク教育システム研究会」を設ける。
 - 統廃合された学校を使った地域ネットワークの教育システムの可能性を具体的に検討する。
- ③NPO朝日町エコミュージアム協会内に「小さな博物館部会」を設ける。
 - 「小さな博物館」設立のサポートを行う。
- ④4地域の産物を使った商品化（新しいがっこうブランド）の研究会を立ち上げる。
 - 地元有志、（協力）農協、民間研究機関、東北芸術工科大学
- ⑤大学などの外部支援機関の窓口を設ける。
 - 「新しいがっこう」のカリキュラムを支援するネットワークの構築と事務局を担当。 — 本学元倉研究室

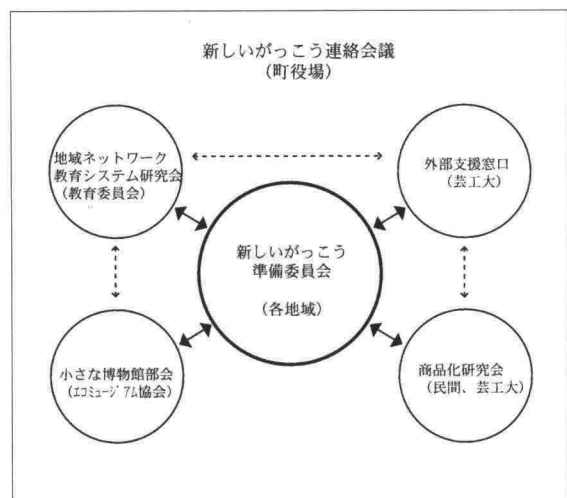


図5 組織づくりのイメージ

(2) 小学校の跡地利用の提案

1) 4校に共通する提案

①小さな博物館

各学校は古い歴史をもち、歴史的な資料が多く残されている。それらを保存するだけでなく、故郷に帰ってきた人や外から訪れる人が、見たり調べたり出来る「小さな博物館」を整備する。さらに学校の資料だけではなく、地域の貴重な資料を保存、研究、展示し、各集落や各家の展示も考える。

小さな博物館はエコミュージアムの「サテライト」と位置づけ、地元の人が「サテライトの案内人」となる。町とNPO朝日町エコミュージアム協会が協力する。

②地域料理カフェ

地域の資源調査から、各地域には自然からの豊かなめぐみや、自らの手によってつくられた作物を使った、ユニークな郷土料理が多いことが分かった。その豊かな食文化を継承し、多くの人に紹介していきたい。

現代の縁側、囲炉裏として、地域の人が気軽に集まる場所をつくり、そこでは外から来た人が、各地域の季節に応じた料理を食べることが出来る。(予約制)

2) 各小学校の跡地利用の提案

旧立木小学校—ヤマメのがっこう (図6)

朝日川をはじめ、「自然観」のある白倉や朝日連峰の大きな自然は、世界に発信できる価値をもつ。活躍しているセンスリーダーを支援し、彼らの拠点として展開していきたい。

旧水本小学校—山のメルヘンがっこう (図7)

朝日町の端部にあるという認識をやめ、県民の森—作谷沢—白鷹山麓の地域の一員として捉える。山形市から近いが、豊富な自然と優しい里の環境が残るため、「開かれた農業」をテーマに広大な遊休農地を活用したい。

旧送橋小学校—谷間のがっこう (図8)

豊富な野菜や果樹、川の産物、山の産物を使った料理のバリエーションが豊富である。農業がしっかりして、地域の人のまとまりが良く、この基盤を強化したい。

旧上郷小学校—ハクチョウのがっこう (図9)

古い遺跡、湧水群、棚田、最上川と白鳥など美しい資源を多くもっている。「町民のトレーニングセンター」という地域の要望を尊重し、さらに内容を広くとらえて「健康のがっこう」を提案したい。

図6 ヤマメのがっこう

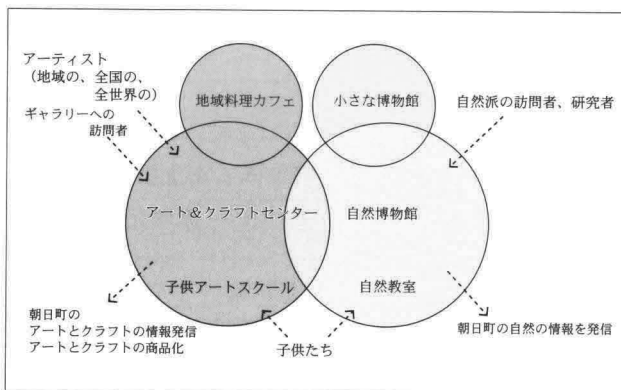


図8 谷間のがっこう

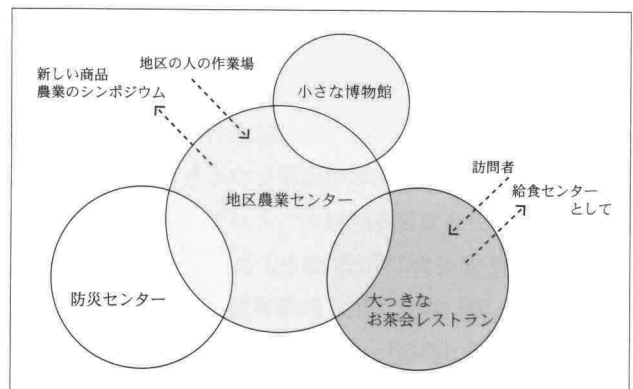


図7 山のメルヘンがっこう

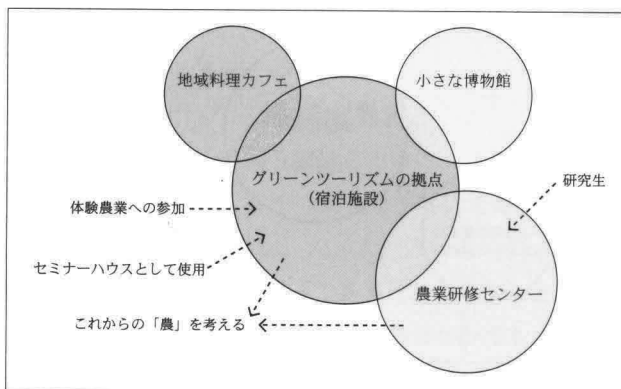
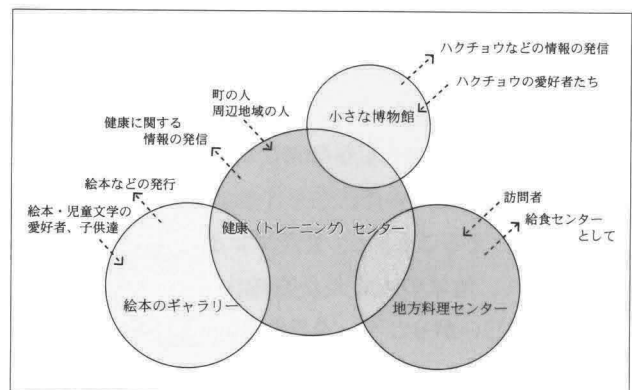


図9 ハクチョウのがっこう



それぞれの廃校施設は、下記の複合体としてイメージされる。

表4 各校の跡地利用の提案内容

廃校施設	施設の活用用途	地区在住の指導者	必要な整備	産業の活性化と施設の運営	小さな博物館	地域料理カフェ
ヤマメのがっこう (旧立木小学校)	<ul style="list-style-type: none"> ・朝日連邦の自然博物館 朝日連邦を軸にした自然の資料を保存展示する博物館、ギャラリー、情報センターとして活用する。 大学や研究機関、自然保護団体などの協力が必要。 ・自然を学ぶ学校 自然あそび研究所として活用する。 川遊びのイベントを開催する。 ・アート&クラフトセンター 蜜蝋燭づくりなど自然を利用したクラフトを中心に、朝日町のアートセンターとして活用する。朝日町在住の芸術家たち（プロアマ問わず）の活動の場として活用する。 ギャラリーとして整備し、内外の企画展や個展をつくる。 アーティスト・イン・レジデンスをおこなう。 —東北芸術工科大学の協力 	<ul style="list-style-type: none"> ・ナチュラリスト ・自然環境教育の専門家 ・蜜蝋燭作家 	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館として展示を整備する。 ・自然の学校として備品を整備する。 ・アート & クラフトセンターではギャラリーとして整備する。 ・アーティスト・イン・レジデンスには宿泊施設として整備する。 (ホームステイも考えられる) 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究者や自然観察をはじめとする訪問者 ・自然学校や川遊びのイベントの参加者 ・町のアーティストたちによる商品化 ・ギャラリーの訪問者、使用者 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の資料 ・地域のたからもの 	<ul style="list-style-type: none"> ・川のカフェ カジカ 岩魚 蕎麦
山のメルヘンがっこう (旧水本小学校)	<ul style="list-style-type: none"> ・グリーンツーリズムの拠点（宿泊施設） 施設のテーマを「開かれた農業」に置き、多角的な農業の体験（水田、畑、果樹など、さらに山の山菜、茸、炭焼きなど）を提供する。 高倉町の星野氏の幅広い多品種農業の様々な考え方で、広大な遊休農地が生きてくるはずである。 グリーンツーリズムの拠点として宿泊施設が必要である。 ここでは、宿泊施設としての成立を検討していきたい。 大学研修生の受け入れや大学や企業のセミナーハウスとしても活用する。 ・農業研修センター 研修生の受け入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・農家 ・炭焼き職人 ・昆虫専門家 ・外国からの農家 ・隣地区の民宿女将 ・農家 	<ul style="list-style-type: none"> ・宿泊施設として整備する。 ただし、学校の内容を残しながら、最小限の設備を加えることから考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グリーンツーリズムの拠点として、また、宿泊施設としての来訪者 ・多品種農業の展開で農業の活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の資料 ・地域のたからもの ・ハッチョウトンボやサンショウウオなど自然の博物館 	<ul style="list-style-type: none"> ・山の料理 汁料理 しんご餅 水本お菓子
谷間のがっこう (旧送橋小学校)	<ul style="list-style-type: none"> ・地区農業センター 地域の要望として「集落センター」が有力であるが、地域コミュニティセンターの域を超えて、農業の充実化と食べ物を介した産業振興のために「新しいがっこう」を立ち上げる。 農産物を中心にした商品開発を行う。 開発された商品の加工場、流通センターとして機能する。 「朝日町ブランド、送橋ブランド」をめざす。 農業に関する研究やシンポジウムを開催する。 ・大っきなお茶会レストラン ここではカフェの域を超え、本格的なレストランから、給食センターまでの可能性を検討したい。 川のもの、山のもの、畑のもの、果物など地ものによる料理をサービスする。 食べることから発想して、なにをつくれればいいのか考える。 平成14年12月には石釜（ピザ釜）をつくり、「大っきなお茶会」を成功させている。 ・山形県（地域）の防災センター（地域の要望） 	<ul style="list-style-type: none"> ・農家 ・農家 ・主婦 ・おばあちゃん 	<ul style="list-style-type: none"> ・レストランとしての魅力をつくるために、改修が必要となる。 他はあまり手を加える必要がないだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・農業のための共同施設（作業場）として利用 ・新しい商品を産みだす ・レストラン、給食センターの利用者 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の資料 ・地域のたからもの ・子供の森の保全 ・鳥や昆虫や植物の展示 	<ul style="list-style-type: none"> ・大っきなお茶会 レストランを参照
ハクチョウのがっこう (旧上郷小学校)	<ul style="list-style-type: none"> ・健康（トレーニング）センター トレーニング器具を使ったトレーニングセンター。 町民が楽しく過ごせる場所づくりが目標である。 お年寄りの健康増進、体力増進だけでなく若い人も参加できるような器具やメニューも用意したい。 卓球、ラケットボール、ミニゴルフ、テニス、ゲートボールなど、ゲーム性のあるメニューも検討する。 「健康」というテーマを幅広く捉え、食べ物、運動、睡眠から、鍼灸、気功、心の健康、美容、環境問題まで積極的に関わっていく。 健康に関わる研究や、シンポジウムなどを開催する。 また、町立病院との連携を考える。 ・地方料理センター 健康を考えると食べ物も重要な要素である。 ここでは他の地域のカフェという内容を越えて、健康と食物という視点でサービスを考える。 ・絵本のギャラリー 地元児童文学作家の記念館として活用する。 絵本、児童文学のコレクションや展示を行う。 地元児童文学作家の講座を開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・有志 ・主婦 ・地区出身の児童文学作家 	<ul style="list-style-type: none"> ・トレーニングセンターとしてのバリアフリー対策、トレーニングの器具、備品も用意することが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トレーニングセンターとして、朝日町周辺の地域からの来館者 ・地域料理のレストランとして広く利用客を獲得 ・食品（給食）センターとして食事のデリバリーを行う ・食品の商品開発を行う (朝日町ブランド、上郷ブランド) 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の資料 ・地域のたからもの ・運跡、湯水群、ハクチョウの資料 	<ul style="list-style-type: none"> ・地方料理センターを参照

3)「新しいがっこう」のカリキュラムと運営プログラム案 — 旧水本小学校を例として

「新しいがっこう」をたちあげるために、試験的に講座等を開講しながら内容を検討していくことが考えられる。以下に講座の例をあげているが、水本地区であれば体験農業を重点的に考えて講座を構成することもできる。

◇テーマ

- ・白鷹山麓の話
- ・昆虫教室 — ハッチョウトンボの話、蛍の話、観察
- ・水とくらしの探検隊 — 中郷堰と湧水池の探索
- ・山で暮らす — 炭焼き編、山菜と茸編、動物編
- ・異文化交流 — 中国の話、韓国の話、料理
- ・大っきなお茶会 — 地元の食べ物食べて語り合う
- ・語りべの会

◇外部からの協力

東北芸術工科大学等の協力

- ・インスタレーション
- ・舞踏
- ・まんだらの里（作谷沢）の話
- ・民宿「はたぎお」の話
- ・グリーンツーリズムの話

◇対象者、期間等

開催期間 : ウィークエンド2~3回で1セット、
年間2セットぐらい（夏と冬）

対 象 : 小学生、中学生
朝日町及び水本地区近郷
山形市、県、全国の子供と大人

宿 泊 : 講座によっては一泊する

参 加 費 : 水本の人、小中学生以外は有償

運 営 費 : 参加費
宿泊費
研究及び活動の助成金

6. 朝日町の小学校跡地利用の動き

(1) 跡地利用に関する調査研究および計画案の報告

平成14年度に行われた調査研究を踏まえて、平成15年6月に全町民を対象に跡地利用計画案³の報告会が開かれた。報告会の席では、4校が廃校になった経緯と施設の現状について町から説明があり、元倉研究室から調査報告と跡地利用計画案が提示された。そして、町民の意見交換の時間が設定されたが、意見は出されなかった。

その後の同年7月に、平成11年から町役場で組織している「学校跡地利用検討委員会」に学区出身者の町職員が加わり、各校4名ずつの班構成で「朝日町学校跡地利用推進プロジェクト」が編成された。各班は、それぞれの地区を訪れて住民と協議を重ねており、各地区の集まりには、毎回10~15名程の地区住民と推進プロジェクト班の町職員4名が参加している。本学の元倉研究室も、学区によっては地区住民への跡地利用計画案報告会および協議の場に同席している。

(2) 4つの廃校小学校の跡地利用に関する動き

ここでは、2003年11月現在の各廃校小学校の跡地利用状況と協議内容を記す。また、実際に試用しながら活用方法を模索している水本地区については、その詳細を紹介する。

1) 旧立木小学校

立木地区では、年中行事の学区運動会も途絶え、施設はほとんど利用されていない。2003年7月から2回にわたり跡地利用の協議が設けられた。地区では、蜜蝋燭の作家や自然教育の専門家が活動し、朝日連邦の登山口としてナチュラルリストが交流を広げるが、それらの活動を廃校小学校で展開するならば、地区は支援したいという旨が話し合われている。

2) 旧水本小学校

旧水本小学校区は、山辺町と朝日町の両町にまたがり、2町から児童が通学していた。そのため、小学校を中心にまとまっていた地区コミュニティが、閉校後に崩壊してしまうことが最も懸念される地区であった。廃校前に町と本学元倉研究室、地区の区長さんたちで跡地利用に関して協議したが、廃校の喪失感や閉校式の準備中で、時期尚早の感があった。

廃校後に1年以上の月日が経ち、住民は、運動会や新春の集いなど「水本三大まつり」をこれまで同様に小学校で催し、交流を続けたい気持ちを持つものの実現できないでいた。

そのような中で、平成15年6月に一人の地区住民が、仕事仲間と共に町外のメンバーで構成する「価値ある水本小学校を活かす会『生楽耕(しょうがっこう)』」を発足させ、跡地利用の協議を始め、お盆に校舎を子供たちに解放した。

その一方で朝日町は、先述のとおり同時期に全町民を対象に学校跡地利用研究報告会を開催し、7月には水本地区の要望で地区報告会を開き、さらに8月に引き続き地区で協議の場を設けたが、廃校への疑問や町の跡地利用への支援に不確定要素が多いことから、地区は、跡地利用に否定的であった。

このように『生楽耕』の活動と、町・地区の跡地利用に関する協議は、互いを知ることなく同時進行していた。

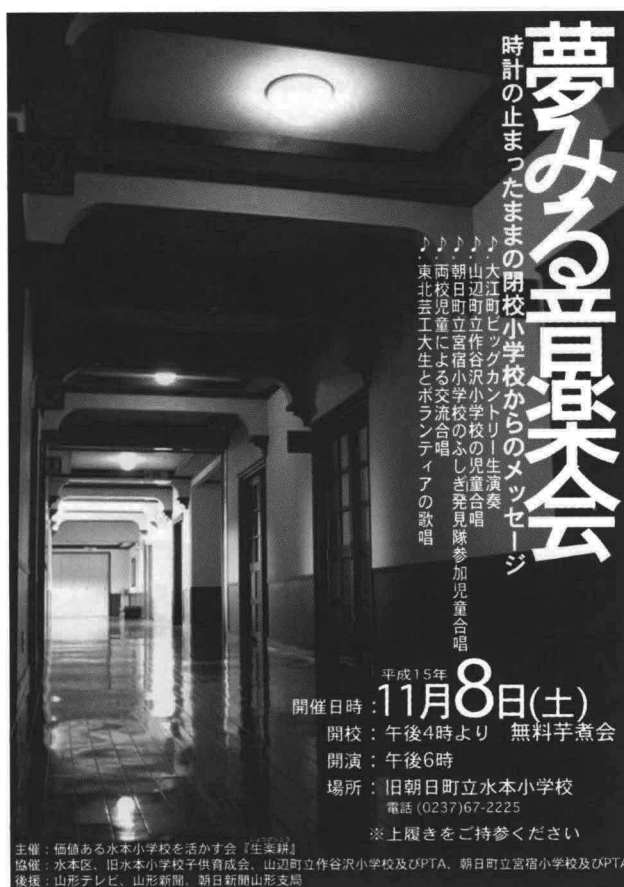
そのような状況下で『生楽耕』が、跡地を利用した第2回目の行事である『夢見る音楽会』を企画した。本企画には、山辺町側の住民や地区協議会の終了後の会話から『生楽耕』の存在を知った元倉研究室が参加して、8月から3ヶ月間にわたり毎週旧水本小学校に集まり、準備をすすめていった。

『夢見る音楽会』の目的は、小さな道路を挟んで向かい合わせに住むが、水本小学校の廃校後に山辺町立作谷沢小学校と朝日町立宮宿小学校に分かれて通うこととなった水本地区の児童2人が、それぞれの新しいクラスメートと一緒に旧水本小学校を訪れて交流し、合唱する夕べを催すことにあった。

音楽会の2週間前からは、打ち合わせも回を重ね、校舎を隅々まで清掃し、敷地の草刈りや掃除をおこない、道標の看板を立て、グラウンドに駐車線を引き、体育館には飾りをつけて、ごぎを敷いて、ステージも設置し、近隣の施設から暖房機を集めて、音楽会にむけての地区住民による準備が着々と進んでいった。給食室にガスをひき、各家庭から里芋やごぼう、ねぎ、白菜、きのこが集められ、音楽会当日は、芋煮とおにぎり、お漬け物と果物の香りが校舎に充満していった。

芋煮を食べながらの2校の生徒の交流会を経て、大江町のビックバンドのボランティア出演により音楽会が幕を開け、両校の小学生の合唱や文集朗読、思い出スライドショー、本学学生の歌唱がそれに続いた。フリーアナウンサーの司会に音響プロの支援、ボランティアスタッフとして準備に関わっていた水本小学校を卒業した中高生も加わった水本校歌の合唱もあり、人々は充実した一時を過ごし、打ち上げ花火とともに音楽会の幕は閉じられた。90名の小学生と200名を超える観客、80名のスタッフが共に過ごす夕べとなった。

山の奥地ではあるが、やさしい里が残る水本地区の特性を活かして、蛍やハッチョウトンボを観察したり、満天の星を眺めたり、自然や農業を体験したり、旧水本小学校までの道のりを親子で歩いたり、不登校の子供とお年寄りが交流する学校をつくるなど、水本では自然教育の専門家も加わり今後の活用のアイデアが練られている。



時計の止まったままの閉校小学校からのメッセージ

夢みる音楽会

大江町ビックバンドのボランティア出演により音楽会が幕を開け、両校の小学生の合唱や文集朗読、思い出スライドショー、本学学生の歌唱がそれに続いた。フリーアナウンサーの司会に音響プロの支援、ボランティアスタッフとして準備に関わっていた水本小学校を卒業した中高生も加わった水本校歌の合唱もあり、人々は充実した一時を過ごし、打ち上げ花火とともに音楽会の幕は閉じられた。90名の小学生と200名を超える観客、80名のスタッフが共に過ごす夕べとなった。

平成15年
開催日時：11月8日(土)
開校：午後4時より 無料芋煮会
開演：午後6時
場所：旧朝日町立水本小学校
電話(0237)67-2225

※上履きをご持参ください

主催：価値ある水本小学校を活かす会『生楽耕』
協賛：水本地区、旧水本小学校子供育成会、山辺町立作谷沢小学校及びPTA、朝日町立宮宿小学校及びPTA
後援：山形テレビ、山形新聞、朝日新聞山形支局

『夢見る音楽会』ポスター



『夢見る音楽会』の受け付け



打ち合わせと校舎の掃除の様子



『夢見る音楽会』の様子と水本地区から二町の小学校に通学する二人による文集朗読



3) 旧送橋小学校

送橋地区では、地区住民25名が組織する「送橋小学校跡地利用検討委員会」が組織されていたが、「谷間のがっこう交流塾（仮称）」を設立し、塾長を選出し、さらに以下の3つの班組織を設けて運営する案が出されている。

1. 農産品開発班 2. 沢内活性化班 3. 都市との交流班

ここでは、豊かな自然やバラエティーに富む地区の農産品、人情味溢れる人々、山形市から車で25分という立地条件を活用して、地区と町内外からスタッフを募り、カジカまつりやでっかいお茶飲み会、雪中運動会などのユニークな地元のイベントを継続し、さらに講師を招いて新しい事業も展開していきたいという跡地利用のイメージが形成されている。

4) 旧上郷小学校

上郷地区では、子供会が毎月1回、体育館で陶芸教室を開催したり、白鳥の餌置き場をつくって設置したりすることで学校を利用している。

今後の案として、青少年会では、音楽室でカラオケの練習をしたり、集落間の交流をしたいという希望が出ている。また、お母さん方が、農産物の加工を試みたいと希望しているが、販売ルートの開拓や食品衛生上の問題のクリアなどの課題があるため、当面は料理講習会を開いて、お年寄りを招待して手作り料理でお茶のみ会をしながら、今後のアイデアを練ることで合意している。

7. 朝日町の小学校跡地利用の今後の課題

朝日町の廃校がある各地区では、跡地利用に関しての協議を進めているが、廃校から一年半から三年半の時を経た現在、まだ活用方法を確定したところはない。地区と町のあいだでは、試用しながら跡地利用の可能性を検討することを確認したが、その過程を経ることは、将来の跡地の活用方法を決定し恒常的に運営するために、地区住民と町が互いに意識を高めあううえで有用だろう。

「5. 朝日町の小学校跡地利用の提案」では、跡地利用に関する基本的な考え方を提案したが、本章では、協議し、試用していくなかで、跡地利用の具体化にむけて見えてきた課題を整理し、跡地利用の進捗状況を把握し、今後の取り組み方を考えてみたい。

(1) 跡地の試用事例の評価 — 『夢見る音楽会』より

1) 活用方法の評価

ここでは、水本地区の『夢見る音楽会』を「5. (1) 小学校の跡地利用の基本的な考え方」の項目に照らし合わせて、活用方法を評価する。

「①学校であることをやめないこと」

音楽会という設定で、発表者と観客のコミュニケーションが成立し、学校思い出スライドショーや文集朗読により地区の歴史や文化、風景の変遷について学ぶ機会が提供された。また、地区住民が団結して準備をすすめ、地区の心が学校を中心にまとまり、地区の学校の役割を果たしたといえる。

「②子供のための施設であることをやめないこと」

地区の児童を介して、大勢の同級生やその兄妹が集まって交流をした。また、地区と周辺地域からの中高生スタッフが活躍し、若者が地域への意識を構築する契機ともなった。

「③自分たちの施設として考える」

地区住民が準備をし、自らも共に楽しむ夕べを開催した。地区内には、小さな集会所しかなく、今後も地区コミュニティの行事を継続するのであれば、施設は有用である。

「④町の公共施設として考える」

水本地区だけでなく、町の他地区や周辺地域からの観客や出演者があり、施設は広いエリアの人々に公共的に利用された。

「⑤外からの人を受け入れる施設として考える」

音楽会の観客や出演者の大多数は、地区外からの人々であり、参加人数も十分であった。音楽会を企画した『生楽耕』のメンバーの多くも町外からの有志であった。

「⑥地域産業の拠点として考える」

今回は、地域産業の拠点としての利用ではなかった。

以上の事例評価から、本計画案と地区の活用方法に関する考え方が近似することがうかがえ、今後の地区協議の中で跡地利用の目標を確認しあうことが期待できる。

今回の音楽会は、室内での行事であったが、地区の環境や資源を活用した跡地の試用が、現在企画されている。地域産業の拠点としての利用は、今後の検討課題である。

2) 運営の評価

音楽会は、地区住民とボランティアスタッフの無償の労働の積み重ねと各自の費用負担によって実現した。また、約20万円の協賛金や募金に加え、様々な物資の提供も受けている。今回の協力者たちが、恒常的にこれらの負担を担いながら、今後も跡地利用を継続することは、好ましくないだろう。特に、運営リーダーとなる人物の多大な負担を公で認めることが必要で、それも踏まえて今後の運営方法を検討していかなければならない。

3) 跡地利用の進捗状況

水本小学校で学んだ者と教壇に立った者が校舎で再開し、音楽会の時を共有できたことへの喜びはひとしおで、地区住民や外部からの協力者の心も温まった。このような文化事業を、過疎化した地区で廃校小学校を利用して地区住民が自らの手で開催したことの意義は大きい。

音楽会は、『生楽耕』が出したアイデアから出発して、両町の小学校関係者およびPTAの協力を得て、本学学生も歌唱やポスターの制作等に携わってきた。しかし、地区住民も共に集まる機会を重ねるうちに、いつしか地元が主導する行事へと変化していった。次回からは、同じ目標を持つ町役場とも協力しようという声が上がっている。

このように『夢見る音楽会』に集まった人たちが、跡地利用を知り、考え、今後の協議テーマとして合意形成したことは、跡地利用を大きく進展させたといえる。

次に、協議の内容や試用の評価および進捗状況を踏まえて、今後の展開について考えてみたい。

(2) 跡地利用の実現にむけた今後の取り組み

1) 跡地利用方法の確定にむけた詳細計画づくり

朝日町は、地区の要望を取り入れて、地区の協力を得ながら跡地利用をすすめる方針を明らかにしている。

これまでは、収入が見込まれる利用方法に限定せずに採算性を考えないものも含めて、地区の資源特性や住民の知恵を活かした活用方法を町と地区で検討してきた。このような協議を重ねる中で、各地区では、跡地利用のイメージが形成されつつある。そこでこれからは、集められたアイデアの実現のために試用を重ね、先進地を見学し、具体的な詳細を検討し、活用方法を確定する段階に移行することが望ましい。

2) 運営主体・方法の明確化

誰が跡地利用を運営していくかが最大の論点となっている。町は、町内の小学校が授業等で廃校校舎を使う際にも受け皿となるように、地区住民を主体に据えた組織づくりを提案している。

しかし、過疎化した地区では、お年寄りが大半を占め、廃校施設は巨大なため、数少ない若者を中心に運営するには、日々の仕事や暮らしを考慮すると負担が大きい。このような事情から、地区住民は、地元の組織づくりに懐疑的である。町や大学、地区の誰かが利用するならば手伝うが、企画から運営まで地元で引き受けることは難しいとの意見が多い。

地区からは、跡地利用に関する地区の意見を集約し、また、公民館的な使い方をするためにも職員の常駐を希望し、ノウハウをもった人に指導を受けたいという要望が出されている。

「3. (2) 全国の廃校施設活用の動向」でも触れたが、「過疎化により廃校となった施設では、常駐職員がいない場合が多く、半数あまりの施設が月2～3回以下の稼働日数であり、毎日活用されている施設は1割に満たない。また、施設整備や運営・維持管理は公的資金に依存する傾向が強く、運営・維持管理を利用料のみでまかなっている施設は、1割未満にとどまる。」という状況が、現在の朝日町の廃校施設にも当てはまる。

町は、跡地利用を決定するまでの移行措置として、廃校後も施設の維持管理費を負担しているが、町の施設として今後も有効活用し続けることを目指すならば、これまで運営にかかわる人々が負担してきた費用や労働負担をはじめとする運営費を覆う程度に収入のある事業を目指すことが望ましい。そのためには、運営費、事業の立ち上げにかかる設備投資、運営に関わる職員の採用を具体的に検討する必要がある。または、町に代わる運営団体を設立または募集する必要がある。

そして、費用の捻出を検討する際には「5. (1) 小学校の跡地利用の基本的な考え方」の「⑤外からの人を受け入れる施設として考える」ことや「⑥地域産業の拠点として考える」視点が不可欠となる。近年では、グリーンツーリズムへの補助金で、新しい施設の建設だけでなく廃校を利用するものもあるが、年間を通して利用される施設への転用を模索しなくてはならない。

3) 廃校施設の当面の利用促進と維持管理

現在は、地区住民が無償で清掃や雪おろしなどの管理をしているが、一校あたりの年間維持費はそれ以外にも約150万円かかり、利用されなければ住民や町の財政に負担をかけるだけの存在となる。閉校前には学校を失う喪失感から跡地利用に関しての協議が困難であったが、閉校後には集落間の交流も少なくなり、学校や跡地利用への関心が薄れていっている状況も見受けられる。また、新校舎であるために年輩の地区住民には馴染みが薄いこともある。

そこで、まず自分たちの学校と認識するためにも、当面はできる限り頻繁に解放し、お茶会の場合等として活用していくことが大切だろう。そのためには、暖房・水道・ガス・電気を復旧し、地区住民による校舎の定期的な利用を促すことが必要とされる。また、畳敷きの部屋を増やしたり、手すりや使いやすいトイレを設置して、お年寄りが集まる際に使いやすくすることを考慮することが求められている。

しかし何よりも、このまま長期間にわたり町の施設を現在の状況下に置くことは避けるべきで、本節の1)、2)でとりあげた取り組みは、早急に着手されるべきである。

8. おわりに

本調査と計画案の報告³をもとに各地区で協議が行われたが、学校跡地の活用を具体化していくためには、各地区で協議された内容をもとに、それぞれの地区での実践にむけた計画をつくる必要がある。

朝日町での廃校の跡地利用は、エコミュージアムのなかの一つとしてとらえることができるが、各地区の学校が互に関係性を持って補完しあい、そしてネットワークしていくことが大切で、そのためのコーディネートが必要とされる。

広大な自然や豊かな農業があり、地区全体で子供たち自身が遊びを創造し、学べる場が学校跡地から広がっていくことを期待する。

そのやり方としては、多額な費用をかけて校舎を改修するのではなく、使いながら少しずつ、何年もかけて作り上げるプロセスを楽しみたい。やがてそこは、人々にとって特別の場所となるはずだ。

この研究が、各地区や町の将来像に基づいたそれぞれの跡地利用の姿を見つけだすために役立つことを望み、今回の報告を終えたい。

謝辞

各地域の環境と資源の調査は、東北芸術工科大学の特別研究としてNPO朝日町エコミュージアム協会と合同で行ったが、協会の菅井正人さんと宮森友香さんには大変ご尽力していただいた。

また、朝日町企画課の富樫清志さんをはじめ、朝日町の多くの関係者のご協力の下に調査研究が進められたことに、心から感謝の意を述べたい。

そして、調査、計画案策定からご協力をいただき、跡地利用の実践にむけてご努力を続けられている、各地区の住民の方々および外部からの協力者の方々に敬意を表したい。

註

- 1 “たからもの”は、良い資源という意味で用いた。
2002年に朝日町でNPO朝日町エコミュージアム協会によっておこなわれた「あさひまち宝探し」を踏まえて用いたが、宝さがしの取り組みは「やまがた宝さがし」からアイデアを得たものである。
「やまがた宝さがし」は、1994年から東北芸術工科大学・情報デザイン学科・情報計画コース（現 情報デザイン学科・未来デザイン学系・情報計画コース）の学生が、山形をさらに暮らしやすく、魅力的にする事を目的に取り組んでおり、県民が大切に思う山形の自然・文化・歴史・伝統そして一人大切にしているものや思い出などを「宝」として、それをもとに今後の山形がどう変化していったら良いかを考えていこうという活動である（やまがた宝さがしホームページより）。
- 2 人的資源については、「5.（2）2）各小学校の跡地利用の提案」に無記名で記す。
- 3 朝日町学校跡地利用計画報告（本報告）の1～5章にあたる部分を2003年6月に朝日町町民に報告している。

参考文献

- 1) 文部科学省（2003）「廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究報告書」、文部科学省施設助成課ホームページ
- 2) 財団法人 地方自治研究機構（1997）「遊休義務教育施設の活用に関する調査研究」
- 3) 国立徳山高専 熊野稔研究室（2001）「廃校の動向及び廃校活用」
- 4) 財団法人 都市農山漁村交流活性化機構（2002）「全国廃校（学舎）活用フォーラム みやぎ・志津川大会」、大会資料

執筆者

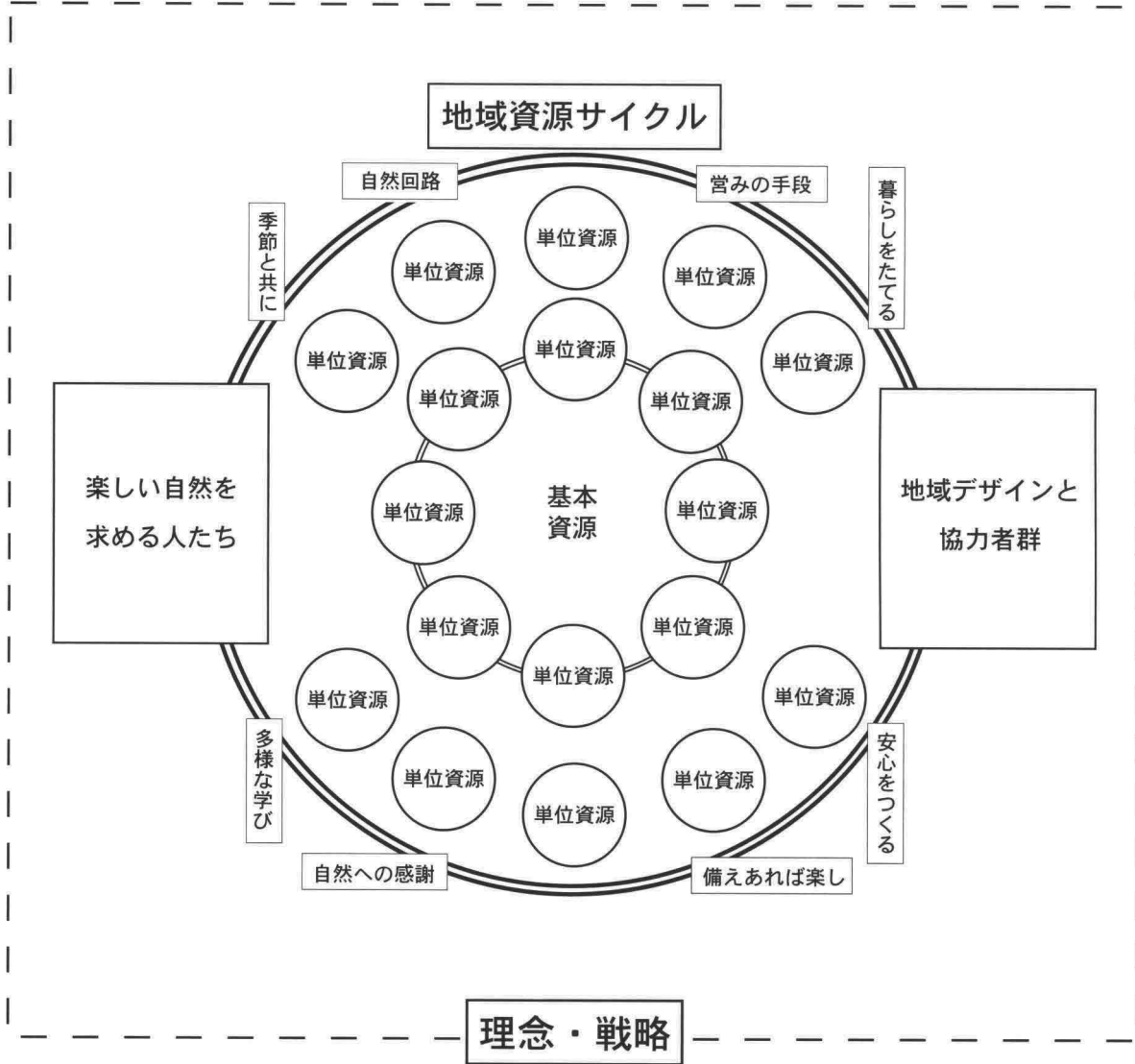
元倉 眞琴 MOTOKURA Makoto	デザイン工学部 環境デザイン学科 Faculty of Design/Department of Environmental Design 教授 Professor
飯田 恭子 IIDA Kyoko	デザイン工学部 環境デザイン学科 Faculty of Design/Department of Environmental Design 助手 Assistant
アレクサンダー ズスト SUST Alexander	ランドスケープ計画 Landscapeplanner

資料1 各地区の環境と資源

	1. 立木地区	2. 水本地区
a. 地域特性として顕著で、 地域の生活文化として保存、 記録しておきたいもの	朝日川の自然と豊かな産物 (渓谷、滝、紅葉、蛍、イワナ、ハヤ、カジカ) 山の自然と豊かな産物 (ブナ、ハルニレ、カモシカ、山菜、茸) 里(畑)の風景と産物 (茅、根まがり竹、ガマ、蕎麦、栗、豆、粟、桑の実、アケビ) 水車 4機 焼き畑(蕎麦、栗、豆) ぶんご梅の大木 古い道の石組み 山の神、地藏様、馬頭観音	山の自然と豊かな産物 (からくりの林、紅葉、ハッコウトンボ、サンショウウオ、 蛍、山菜、蕨、茸) 水環境 (送橋川の源流、中郷堰、湧水池(溜池)、長谷地ため池) 神様 (虚空蔵様、山の神様、お水神様、馬頭観音、炬庚塚、堰の跡) 炭焼き技術 民話 地場料理 (季節の汁料理、混ぜご飯、しんこ餅、水本お菓子)
b. 他の人たちにも伝えたいもの、 共にやっていきたいもの	川で遊ぶ (蛍と遊ぶ、カジカの声を聴く、石の採集、石絵の制作、 釣り、イワナのつかみ取り、イワナの流木焼き、掻堀り漁法) 朝日川渓谷の紅葉鑑賞 昆虫探検隊など自然観察 蜜蝋燭づくり 地域の料理 (川魚の料理、炊き込みご飯、蕎麦:伝統 - 蕎麦きり、かいもち、 はっと、鯉だしの蕎麦、山鳥だしの蕎麦きり、山菜カジカの天ざる)	地場料理 中華料理、韓国料理 希少昆虫の観察、自然観察 水の探検隊 山菜取り、蕨狩り 蛍狩り 炭焼き体験 外国(中国、韓国など)の異文化交流
c. 商品の可能性	ガマの籠筵、ガマのはばき、手帳カバー、手提げ、ランプシェード 川の料理 - 山菜カジカの天ざる 蜜蝋燭(商品化されている)	地場料理 - 汁料理、しんこ餅、水本お菓子

	3. 送橋地区	4. 上郷地区
a. 地域特性として顕著で、 地域の生活文化として保存、 記録しておきたいもの	谷間の風景 川の自然 (ヒノ沢の清流、長が滝、どんどん川、川鳥、蛍、 ウグイスの谷渡り、ヒノ沢のシジミ) 広い共有林(60ha) 和田の大コブシ(種まきコブシ) 神社のキャラの大木 相座家秘伝「天文雲気老い東方策」 水車小屋での歌 十本木遺跡 小横和紙(楮、三股) 秋葉様、馬頭観音、大橋の地藏様 子供の森	棚田、お花畑、石積み畦 いもがわ溪谷美 上郷湧水群 - 豊巧大明神様の湧き水、日陰の沢湧水、 帯状にでる伏流水、原始的植生、春先の水芭蕉 体によい水 大きい桂の林 白鳥の編隊飛行 上郷焼き(平清水焼き系) 早田の縄文中期板状土偶、石蔵 上郷石 二渡神社の俳額
b. 他の人たちにも伝えたいもの 共にやっていきたいもの	りんごもぎ ヒノ沢の農道散策 川干しつかみ捕り 谷間の蛍祭りと川床沢内まつり バタラ水車 地場料理、石釜料理 - 山のシジミ汁、タニシの味噌煮、 松茸料理、炊き込みご飯、杵つき餅、蕎麦きり、和風ピザ	童話作家 - 最上一平創作童話 上郷焼き - ほうづき窯 上郷ダムの紅葉
c. 商品の可能性	山菜の栽培 豊年合宿所 バタラ水車 地場料理、石釜料理 - 山のシジミ汁、タニシの味噌煮、 松茸料理、炊き込みご飯、杵つき餅、蕎麦きり、和風ピザ	最上川散策コース - 棚田、早田、花畑、針生坂、十二歩 上郷焼き いもがわ溪谷美 地域の料理 - 水と蕎麦きり、花と器と料理

資料2 地域資源の要素と構成図



資料3 立木地区の資源の分類と関係図

自然への回路				基本資源	営みの手段				関係	
明確な四季 積雪2m	カモシカ 遅い春	ハルニレ コブシ	イワナ カジカカエル	情報	栽培暦、指導員				命 を 繋 ぐ	
		根曲がり竹 ゼンマイ、茸	ハヤの天麩羅	販売	ワラビ、ウド、山竹、シドケ (竹田常雄さんが最初)		炭焼き 原木ナメコ			
	カンジキ	竹、つる 杉	水車 4機	道具	耕運機、鍬、鎌、しよいこ 熊手、ホーク、にな、牛鋤		バツ、トビ 鋸、鉋、鉋	馬そり 橇		
	粘土	茅、 用材、被覆材	土台石、砂利	住	ガマのムシロ わら、初殻					
		くぐ、スゲ	ガマはばき	衣	青麻、わら、みご、兎					
冷え 凍餅、凍大根	兎、雉、山鳥 熊	木の实、山菜	流木で焼く イワナヤマメ	食	蕎麦のタレ 鯉、山鳥、カジカ 汁物 兎、雉、エレガ、納豆	彼岸のアケビ さなぶり餅	弁当おかず 味噌漬、梅干			
天火干し	ゼンマイ茹で	樺の皮	燻製(いろり) 流木	火	焼畑 - 蕎麦、粟、豆 3年で定畑 大根、白菜	お柴灯	蜜蠟燭			
季節風	雪の回廊	湧き水 飲み水	井戸 生活用水	水	用水、灌漑、初浸、発酵		木流し			
気	山	森	沢や川	暮らし	農 業	歳時記	林 業	流通		基 本
観点望気	親株を遣す	アケビ干 砂栗		備 え	天火干し 大根・茄子・紫蘇 塩蔵 野菜・山菜					安 心 を 作 る
	山岳救助隊 銀玉水	物候 桜、虫		守 り	白倉のふんご梅、ブナ林 地種の採取、オヒョウの木	女正月1/15 田楽、甘酒、会話				
	毒、薬草	山菜、茸の 取り付・加工	ヤス、釣り	会 得	山菜育種、牛馬耕、ハセ掛け	七夕の煮付け				
		舞茸や松茸採り	石の収集 搔摺り漁法	楽 しみ	さなぶり 甘さ 桑の実煮詰めて かいこ餅	冬のお茶飲み 秋の洗濯休				
霧氷、雲海	朝日川溪谷	紅葉	鯉蛙の声、螢 清流、冬の川	美 しさ	古い道の石組み					
お月様 朝日大権現	山の神		地藏様	神 々	山の神	雨乞い地藏	山の神	馬頭観音		

資料4 水本地区の資源の分類と関係図

関係	自然への回路				基本資源	営みの手段				関係
	気	山	森	沢・川		農業	歳時記	林業	流通	
季節 と 共 に	二百十	カモシカ 穏やかな台地	送橋源流、昆虫 木の实、山桜	ハッチョー蜻蛉 水芭蕉、山吹	情報	観光蔵園(ホップ園跡等) 水本街道、国境、道者の道	畑谷の平蔵と 丹波の力自慢	爺婆産業 炭焼き技術	玄関は山形市向き	暮 ら し を 繋 ぐ
			茸、山菜		販売	米、蕎麦、ホップ 牛乳、山菜シドケ・クラノ芽	螢	杉、樺、炭薪		
				箱眼鏡 網、ヤス	道具	耕運機、梯子、		炭窯、楔、鉞	馬櫃、櫃	
			茅、竹 杉、被覆材		住	藁、初穀				
			くぐ、スゲ	藁	衣	羊、ホームスパン くず藁、真綿、藁細工				
		山兎、雉、山鳥 笹熊、蝮	山兎汁、実 山菜、茸	河鹿、ニガパイ	食	鶏、山羊乳、兎 変わり味噌、油味噌・卵味噌	夏の食べ物 だし・冷し汁	ころびつ弁当		
				煤の防腐剤	火	着火順序、おぎ・つけ木・杉葉 柴・割り木・おぎ・消し炭				
基本			ガンにならない お水神様の水	コリンゴ、水苔 泥炭層	水	螢の湧く堰、田螺、泥鰌 長谷地ため池	いろいろ 暮らし			基本
	気	山	森	沢や沼	暮らし	農業	歳時記	林業	流通	基本
多 様 な 学 び			薬草づくり		備え	天火干し、漬物 家畜、山羊-健康 羊 ホームスパン				安 心 を 作 る
			薬草、編笠ユリ センブリ・猫足	ハッチョートンボ	守り	なすまえ、区長への報酬				
	新しい嫁さん 中国、韓国料理	身の回り素材の 四季のお菓子	山兎の捕獲 昆虫観察	魚の手づかみ	会得	山菜育種(高橋熊次郎氏)	上手い四季の汁	木登り		
		きれいな所巡り	木の实採り 茸・山菜採り	螢祭り、魚捕り	楽しみ	さなふりと餅 いろいろ、青菜の餅焼き飯・焼き芋	ひな祭り 紅白の新子餅			
		養蚕団地 椿峠、刈倉	螢が群れ飛ぶ	ため池の湧水池	美しさ	編み笠ゆり(切り花にした) 秋の水田と赤トンボ				
		虚空蔵様 山の神様		お水神様	神々	山の神、露に包んだ供え物	馬頭観音 姫庚申塚			
関係	自然への感謝				基本資源	備えあれば楽し				関係

資料5 送橋地区の資源の分類と関係図

関係	自然への回路				基本資源	営みの手段				関係
	気	山	森	沢・川		農 業	歳時記	林 業	流通	
季節 と 共 に	物候、辛夷の花 上日照横風下雨		緋の沢の紅葉と 山哲学の道	昔の名称下郷	情 報	谷間の耕地、種蒔きこぶし 桃の送橋 林檎-清野豊志氏	昔の遊び、水車小屋 山遊び・川プール・櫓乗り・栗拾い		ご番所	暮 ら し を 繋 ぐ
		アマユリ栽培 堆肥・植え替え			販 売	果樹-柿・桃・林檎 養蚕、古模和紙・楮三股 徳用-葉たばこ・ホップ 醸農			大蔵街道	
			矢竹	漁-搔振・夜突 釣り	道 具	耕運機、脚立、牛・馬の道具 動噴、紙漉き道具、石釜	正月のお供え	鋸・鉋 バズ・トビ		
			十本木遺跡		住	桃景気で新築 藁・羽殻				
					衣	青麻・ホームスパン				
		マタタビの実 精力剤	兎・狸・穴熊	松茸 ミヤマシジミ	食	蕎麦-蕎麦切り、かいもちほっと 田螺の味噌煮、炊込ご飯、	送橋ピザ		松茸解禁	
			杉葉 薪・柴	鉱泉	火	養蚕の炭とさま	お柴燈	春木山(薪)		
				ひの沢湧水 塩平の岩塩	水	水の揚げ口・大堰	和田の大こぶし			
基本	気	山	森	沢や川	暮らし	農 業	歳時記	林 業	流通	基本
多 様 な 学 び	村づくり実行委	共有林60ha 薬草	川鳥の生息	アブラハヤ ウグイ・河鹿	備 え	野菜の天火干し・漬物				安 心 を 作 る
	長寿クラブ	赤松林	リス・カモシカ ムササビ・鱒	川泥鰌・鮎 アカメロ	守 り	神社のキャラの大木 自給野菜の栽培技術				
	お手玉遊び唄	松茸管理	山菜料理 天麩羅・和え物	水車の唄	会 得	りんごのお菓子	剣道、川遊び 笹巻・ナタ巻			
		山遊び 栗拾い	紅葉、イタヤ桐 ウリ肌楓、山桜	夜突き・河鹿捕 搔振・釣り	楽 しみ	りんごもぎ 刈り上げ餅、さなぶり		お茶飲み会		
		大蔵街道からの 朝日連峰と月山	コブシ、ツツジ ウグイスの声	湧き水 ひの沢の清流	美 しさ	神明神社境内 十本木のりんご団地				
		オタテ山の 山の神・明神様	秋葉様		神 々	馬頭観音様	子供の遊び場 大橋の地藏様	山の神の柴燈		
関係	自然への感謝				基本資源	備えあれば楽し				関係

資料6 上郷地区の資源の分類と関係図

関係	自然への回路				基本資源	営みの手段				関係
	気	山	森	沢・川		農 業	歳時記	勤 め	流通	
季節 と 共 に	二十の台風	上郷焼き 平清水焼き系	創作童話	渡り鳥 白鳥・鴨	情 報	早田-縄文中期板状土偶、石畿 坂のある村	風祭り 重箱料理・酒			暮 ら し を 繋 ぐ
						販 売	米・蕎麦・柚・桃・林檎 ホップ・葉たばこ		薪炭	
				築場 舟、網	道 具	耕運機・草刈り機・鎌 足踏み脱穀機				
		陶土 茅 土合石	鉄砲 杉、松、栗		住	ワラ、家回りの花畑				
		クダ・スゲ			健 康	兎の皮 畑の先生	シェプアップクラブ、南中ソーラン節体操 ママさんバレー			
			兎汁、叩き	鮎・八つ目鯉 鮎・ハヤ・鯉	食	蕎麦切り、南蛮粉、兎肉 鯉-甘煮・鯉こく・アライ	上郷の童謡 銀のうさぎ	椎茸		
		上郷石分布 日陰沢～源六沢			火					
		湧水植生、大桂群 上郷湧水群、1ヶ所水量 シダ 水温9.5度 350~500L/分			水	上郷用水-早に弱い				
基本	気	山	森	沢や川	暮らし	農 業	歳時記	林 業	流通	基本
多 様 な 学 び					備 え		青年団交流会			安 心 を 作 る
		どうたん 大ツツジ	エビネ、いわ豆 春蘭	水芭蕉	守 り	仕事不二-適地適作人 石積の畔と 棚田、出稼き後 秋の麒麟草・釣鐘人参・ウメバチ		災害協力		
			山兎の毘	沢蟹とり	会 得	花作り、上郷石の	わんぱく学校	炭焼き		
		上郷石	山野草 エビネ・春蘭	白鳥、釣り	楽 しみ	さなぶり、蚕餅				
				上郷ダムの紅葉	美 しさ	畔や崖の植物と花 標高差のある棚田と安山岩				
					神 々	二渡神社の俳額				
関係	体験からの健康				基本資源	備えあれば楽し				関係

